異国人からみた日本の 大学・研究所

Manuel E. Brito*

このようなタイトルで幾つかの意見および経験を簡単に語れると思われるかもしれないが、この国での滞在が長くなる程に複雑な宿題となることは読者にも想像ができるであろう。

まず、異国人って誰の話であろうか。「外人」と普通呼ばれる日本国籍を持たない人間と「内人」である日本人とを比較すると、文化の相違以外には見当たらない。なぜならば、一般に日本人は単一民族国家と呼ばれているが筆者からみると内人は一目で分かるぐらい、モンゴル系、朝鮮系、ポリネシア系などの多民族で構成されている。言い換えれば、内人は自分の *habitat* を離れると外人になってしまう。では、筆者のように偶然に日本で教育を受け、長い間この社会で生活し、この国となじみ深い者を「外人」と呼ぶか？ *quasi*-内人と呼ぶか？ 難しい言葉の問題になると思う。筆者にとっては江戸時代に語られた「異国人」の方が理解しやすい言葉である。そして単純に異なった国の者として接触してもらいたい。決して、どこかの国の代表として扱ってもらいたくない。

一般的に、来日したばかりの異国人が日本の印象について聞かれると、二通りの答えをする。それは好きか嫌いかであり、その後にそれぞれについて本を書けるような比較文化論的な演説が始まる。読者の中にはこのような経験をした者もあるだろう。ところが、演説の長さは日本滞在期間に反比例していくのは極めて面白い現象である。現象の解析は簡単ではないが、筆者なりに考えてみると理由が二通り思いあたる。異国人が日本に長期滞在することによって、一つは日本

に対する理解度が高くなるため意見を出しにくくなること。二つ目としては、議論の少ない日本社会に染められていくことである。もし後者が事実であるならば、本人だけの「日本被れ」にしか過ぎず、異国人の居住が日本社会にはプラスにならない。なぜならば、異国人が日本文化に対し完全無視するか完全に迎合する態度をとれば、日本文化に対して新しい血を導入することにならないからである。

筆者は日本政府のお客さん(文部省奨学生)として来日してから12年近くになる。筆者としては日本に対して新しい息吹を吹き込もうと、自分の理解を越えた日本の大学・大学院システムについて当初から文句を言い続けてきた。一方、筆者の研究の仕方や生き方について先生や同僚から批判を浴びなかったとは言えない。しかし、このようなやりとりの中で、自分にとって有益である方向へ向かっているのは大変喜ばしいことである。

日本の教育方針は国内重視型の教育をとってきたように思える。しかし、これは日本に限ったものではなく、世界の国々のいたる所で見られる方針である。確かに、このような教育方針を推し進めようとする人々を批判しても仕方がない。だが、「日本には日本のヤリカタがあって、それでうまく行っているのに、どこに問題があるか」と言った発言を教育者から聞くと少し不安がよぎる。筆者としては、国の代表となる研究者や技術者を育てていく教育システムでは近視眼的な発想だけでは、不十分だと思う。

本題に入る前に筆者のバックグラウンドについて述べておこう。会う人に「ラッキーな人間だ!」といわれることがある。南米のヴェネズエラで大学を卒業してすぐに、自分で見つけた多国籍企業で安定な職を持ち、妻もコンサルティング・エンジニアとして勤めていた。奨学金による日本への留学を企画したとき、家族を持つ者として経済的な損失が気になった。当時の奨学金はその時の収入の1/4にしか過ぎず、その上、日本の物価の高さについてはすでに耳にしていたから不安を感じないはずはなかった。夢の留学はリスクなビジネスではあったが、筆者にとっては昔からなじみのある言葉「ハイリスク、ハイリターン」を胸に留学先の日本へ出発した。

この12年の間に研究生・大学院生から大学助手、招聘研究員そして通産技官(研究員の事!)の職歴を経ながら、文部省、科学技術庁そして通商産業省を局所的に観察してきた。ここで、局所という言葉強調したい。なぜならば、国立大学でも、国立研究所でもそれぞれ個性があり、それらの中の一つで経験したことがかならずしも一般論になるとは限らないからである。では、電車の旅のつもりで筆者が下車した駅に例えて話しをする。

一番最初の駅は大阪外国語大学であった。ここでの短い滞在は日本語研修期間であるはずが、筆者にとっては、日本人と同じように義務教育でしか学んでいない英語を身に付ける時期でもあった。当時の強い印象として残ったのは、日本人

* 名古屋工業技術研究所主任研究官(〒462 名古屋市北区平手町1-1)

Japanese Universities & Research Institutes as seen by an IKOKUJIN; Manuel E. Brito(National Industrial Research Institute of Nagoya, Nagoya)

Keywords: *higher education, research, the japanese way*

1994年8月15日受理

にとって外国語を習うには大阪外大はうってつけの場所だということである。半年毎にあるゆる国々から来た200人近くの異国人留学生が舞台に立って、学生にありのままの外国について聞かせ、異国人との交流を発展できる環境であった。このような環境を積極的に利用するのは学生の意志に任せられていたと思われる。筆者にとってここでの滞在は、スタートからすべて薔薇色ではなかったが、次の駅へ行くための基礎的な日本語の勉強ができ、母国語であるスペイン語や国の紹介という役割も果たせたと思う。

次の駅となる長岡技術科学大学に下車してから再乗車するまでには7年間を必要とした。最初の1年間は文部省奨学生として研究生の生活を命じられ、この間は筆者が大学院生としての適性を調べられる重要な時期であった。ところが、当時の長岡技大は設立されたばかりで、環境を整えている最中の大学であった。このような環境で初めての西洋人学生として筆者が置かれて、本人にとって極めて面白い過程が始まった。当時の口癖は「どうして俺がここに居るのか？」で、担当の先生方としても同様であったに違いない。イメージトレーニングした大学院生活と全然違った姿をもつ長岡技科大の研究室、(すべての研究室!)は筆者にとって大きなショックであった。なぜならば、殆どの大学院生は宝くじのようなシステムで各研究室へ配属されたからである。つまり、研究の中心である大学院教育を受けている研究者の卵達の駆動力が責任感以外にみあたらないと筆者は考えるようになった。ヴェネズエラで或日本人の先生に教わった「研究=興味=好奇心」は一体どこにいったしまったのだろうか。身の周りでは義務的に研究をしている人間ばかりで、材料科学に対する深いバックグラウンドもなしで、いきなり研究をやっていることを見て、驚きつづきの数箇月が経過した。

まもなく、驚きが文句へと変わった。これに対し先生方は筆者の行動を批判しながらも文句の内容に耳を傾けてくれたし、また時間(incubation period?)の必要性を強調される先生もいた。時間がたつにつれ、筆者のトレードマークとなったキューバのカストロ大統領風ひげのために老けてみえるせいか? 異国人であるせいか? わからないが、大学院生だった筆者に対し先生方が同僚の研究者のような扱いをしてくれたことはとても嬉しく思った。その内、同じ扱いをされていた後輩達の研究活動の発展をみて、さらに満足感を得た。長岡技科大とともに成長していくことになった筆者の運命は大学院生としての生活は凸凹の道であったが、留学の最初の目的であった学位取得は当時はやりのテレビ番組のタイトルのように「皆様のお陰です」と言った具合で果たすことができた。この7年間、長岡技科大は田舎大学から世界の大学へ急速に発展し、大学院生の研究に対する駆動力が好奇心に

なった今、さらに発展していくことが十分期待できる。その過程に参加した者として嬉しく思い、当初の驚きや文句をいったことが自慢へと変化していった。

学位論文の延長として東京大学の先生のもと、関東で研究活動が続ける機会が得られ、次の駅はつくば市となった(つくばには電車站がないがバスターミナルがあるので許してください)。日本政府において初めてともいえる Post-Doctoral 制度(STA フェローシップ)を利用し、科学技術庁の無機材質研究所で研究することになった。ここで筆者は東大の生産技術研究所と共同で、主に透過型電子顕微鏡の観察によりセラミックス-金属接合界面の構造解析を行った。材料科学の研究にふさわしい環境を求めて留学した筆者は、つくばの国立研究所の豊かさに驚いた。最先端設備を整えているだけではなく、研究者の高いポテンシャルにも驚き、大学院へ進学するときにイメージトレーニングした環境や先生方がまさに揃っていた。予定していた時期よりも多少遅くなったけれども、これも筆者にとってラッキーな運命の一面であると思う。飛び込んだ環境で不思議に思った(思っている!)のは西洋的な雰囲気があり、外国の国立研究所のフレームワークで日本人の研究者が従事している“って感じ!”(流行の言い方が許すかぎり!)。勿論、このような環境になると筆者が長岡の時代にわずかながらも得た日本的な平等さがどうしても崩れるようになる。現在、世界規模の現象としてみられる「研究成果=論文数」がつくばの研究所にも押し寄せ、その波に乗り切れないあるいは乗りたくない研究者もいるようである。最近のことであるが、Nature に載った記事ではUKの科技庁に相当する省庁が予算を決める過程から論文数のようなパラメーターを廃止したことを伝えていた。

国立研究所である無機材質研究所は研究機関でありながら、立派な教育機関でもある。若手の研究者、特に学位を持たない者が最初の宿題として学位を取得することが各自に与えられるように見える。それにはベテランの研究者が科学的な観点から応援や協力をし、まさに本音の「御指導や御鞭撻」の世界である。

今度、つくばを離れ、名古屋駅に到着してから二年たった。筆者は暫くこの駅で研究を続けたいと思っている。

通商産業省の研究機関である名古屋工業技術研究所ではちゃんとした職員として、構造セラミックスに関する研究を進めている。以前経験した研究環境と比較して違った味を感じているところであり、この頃、基礎研究を重視しようとしている国立研究機関では大学時代やつくばで筆者が得たものとは異なる大変興味深いプロセスが始まっている。この舞台に立つ一人の役者として名工研の発展に貢献することができたから幸いに思う。